

安曇野市における神社の景観特性と祭礼に関する研究

藤居良夫¹, 武藤由華²

¹ 信州大学工学部, ² 株式会社オリエンタルコンサルタンツ

A Study on Landscape Characteristics and Shrine Festivals of Shinto Shrines
in Azumino City

Y. Fujii¹ & Y. Mutoh²

¹Faculty of Engineering, Shinshu University & ²ORIENTAL CONSULTANTS

Abstract: Rural areas with their abundance of agriculture, life and culture bring about rural landscapes, which are composed of various elements, namely, the natural element of the local topography, the artificial element of farmland and settlements formed by the local community, and the cultural element of history and local entertainments. Among rural landscapes, the Shinto shrines have taken on a cultural landscape which has been sanctified in an integrated manner with surrounding environment as a space of shrine forests and the shrine festivals. In this study we analyzed the landscape characteristics of individual Shinto shrines and the content of shrine festivals within the sphere of shrine parishioner in Azumino City, and we investigated the whole concept of the district shrines. As a result, we obtained the following conclusions. The Shinto shrines have been woven into the living sphere of local residents in Azumino City. The shrine forests are large in area and assume the role of district landmark. The maintenance of shrines and shrine festivals leads to not only the preserve the identity of traditional cultures but also the support and progress of local communities by making use of the ceremonious-showy landscape.

キーワード：神社，景観，祭礼，安曇野市

Keywords: shinto shrine, landscape, shrine festival, Azumino City

1. はじめに

長野県では、県内の農村景観を県民共有の財産としてより美しいものに磨き上げ、さらなる発展につなげ、各地域の農村景観を世界に誇れるレベルにまで高めていきたいとしている¹⁾。農村景観はそれぞれの地域の自然的要素、伝統・歴史・文化的要素、生活・活動要素などが組み合わさり形成される¹⁾。地域固有の農村景観を保全していくための基礎的な資料として、住民たちが地域の自然、伝統、歴史、文化などどのように関わってきたかを明らかにすることは重要である。本研究では、地域における住民の自然、伝統、歴史、文化などへの関わり方の一端が現れていると考えられる神社の景観に注目した。神社は鎮守の森や祭礼空間として、また地域の人々の交流の場として農村景観における重要な要素であり¹⁾、さらに神々と祭りの景色というのは風

土により生み出される文化的な景観を構成する^{1,2,6)}。このような神社に関する研究では、自然環境の指標として神社林の樹種の種別とその構成を調べたもの³⁾、上流域を対象に地理的環境と神社の性格から神社を分析したもの⁴⁾などがあるが、田園地域における氏子圏に相当する地区を対象に神社の景観特性や祭礼などから包括的に神社の景観を分析した例は見あたらない。そこで本研究では、田園風景が卓越する地方都市において氏子圏に相当する全ての地区⁵⁾を単位に、地区における神社の景観の特徴を明らかにすることを目的として、神社の立地の景観特性を把握し、景観を神社のもつ意味に照らして考察した。ここで、神社のもつ意味を知る情報として、神社の祭神および祭礼⁶⁾を考えた。

2. 対象地域と研究方法

本研究では、全国でも屈指の田園景観を誇る長野県安曇野市を対象とした(図-1)。安曇野市は松本盆地の北西部の複合扇状地にあり、2005年に豊科町、穂高町、三郷村、堀金村、明科町が合併して誕生した市で、全83地区からなる。この「地区」は、町内会や自治活動の母体となっている区域である。安曇野市では、合併以前の旧5町村をそれぞれ豊科地域、穂高地域、三郷地域、堀金地域、明科地域と呼んでいるため、ここでも、旧5町村を表す場合は「地域」とした。本研究で対象とする神社は、安曇野市内において一般的に地区の氏神様と呼ばれる神社で、氏子圏に相当する地区単位の神社⁵⁾であり、その総数は71社となった。図-1に神社の分布を示す。研究方法は、神社の現地調査、旧町村史などの資料⁷⁾調査、安曇野市の全83地区の区長および氏子総代に対する地区の氏神および祭礼に関する聞き取り調査とアンケート調査を行い、地区における神社の景観特性(地区から見た立地、参道、方角、地形・地物から見た立地)と祭神、祭礼を調べた。

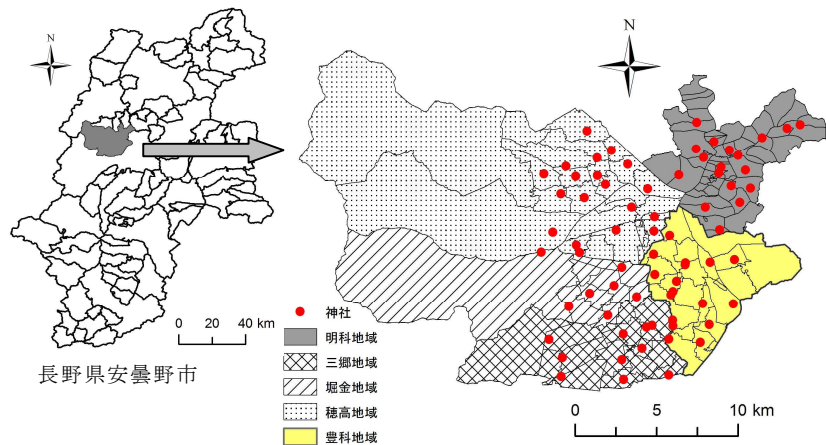


図-1 対象地域と神社の分布

近接型が7割を超えており、民間信仰の影響⁸⁾が考えられる。これらから、エッジ型かつ外部型は15社(21%)のみとなり、安曇野市における地区内の神社の多くは住民の生活圏のより近い位置に立地していることがわかる。

(2) 本殿の方角

本殿が八方位のどの方角を向いているかを調べた。結果は表-3で、安曇野市全域で最も多かったのは東で33社(46%)、次に南で26社(37%)であった。本殿の向きは、神棚と同様に東か南に向いて建てるのが良いとされている^{9,10)}が、これに合致して東と南または南東を合わせると61社(86%)を占めていた。

(3) 参道の形状

俗域と聖域とを連絡するために設けられる道とされる参道¹¹⁾の形状について、直線的に境内に達するものを直線型、ゆるやかな曲線を描いて境内に達するものを曲線型、折れ曲がって境内に達

3. 神社の景観特性

(1) 地区からみた神社の立地

まず、農地が卓越する地区内での神社の立地について、地区の境界線と神社との間に住宅域がある場合は内包型、住宅域がない場合はエッジ型の2つに分類した。ただし、その住宅域が地区の端に位置する場合はエッジ型とした。結果は表-1で、安曇野市全域では内包型が31社(44%)、エッジ型が40社(56%)とエッジ型が若干多い。地域別にみると、豊科地域と明科地域ではエッジ型が多く、穂高地域では内包型が多かった。次に、地区内の住宅域と神社の立地について、神社が住宅域の中に立地するものを内部型、住宅域に接して立地するものを近接型、住宅域から離れて立地するものを外部型として3つに分類した。結果は表-2で、安曇野市全域では近接型30社(42%)と内部型17社(24%)の合計で約7割を占める。地域別にみると、穂高地域以外の地域では、内部型あるいは近接型が多い。とくに明科地域では、

表-1 地区内における神社の立地

(単位:社)	豊科	穂高	三郷	堀金	明科	合計
内包	5	16	4	4	2	31
エッジ	13	3	6	3	15	40
合計	18	19	10	7	17	71

表-2 住宅域と神社の立地

(単位:社)	豊科	穂高	三郷	堀金	明科	合計
内部	7	3	4	2	1	17
近接	5	7	3	3	12	30
外部	6	9	3	2	4	24
合計	18	19	10	7	17	71

表-3 本殿の方角

(単位:社)	豊科	穂高	三郷	堀金	明科	合計
東	6	10	8	5	4	33
南	8	8	2	2	6	26
西	1	1	0	0	2	4
北	0	0	0	0	1	1
南東	0	0	0	0	2	2
南西	3	0	0	0	2	5
合計	18	19	10	7	17	71

するものを屈折型、参道がなく街路に境内が接するものを接道型として分類した。結果は表-4で、安曇野市全域では直線型が35社(49%)と約半数を占め、次に接道型が17社(24%)、曲線型が14社(20%)であった。地域別にみると、他の地域と比べて明科地域では曲線型と屈折型の合計が半数を超えているが、これは地域の起伏のある地形的な条件が関係していると考えられる。

(4) 地形・地物からみた神社の立地

まず、地形の形状から、平野部に立地するものを平地型、山間に立地するものを山中型、山の頂に立地するものを山頂型、平野部もしくは山間に立地しているが本殿の背後に山が迫っているものを山裾型、平野部に立地しているが丘陵または山の頂部に同名の社が祀られているものを奥宮・里宮型(山の頂にある神社を奥宮、麓の神社を里宮)として分類した。結果は表-5で、地区内での神社の立地と同様に、生活圏が集中する平野部に立地する平地型が47社(66%)と最も多かった。地域別にみると、明科地域では山中型や山裾型が多いが、これは地域の起伏のある地形的な条件と、2地区(大足地区、潮沢地区)では集落単位(9集落)で神社を祀っていることに関係していると考えられる。また、奥宮・里宮型として分類した穂高神社では、奥宮が上高地にある明神池のほとりに立地している。明科地域潮沢地区天田集落にある山神社は集落の氏神として祀られている唯一の山頂型の分類例である。また、神社の立地する標高を調べた結果が表-6で、安曇野市全域では生活圏が広がる標高約650mまでに62社(87%)が立地するが、上述の山神社は最も高い790mに立地する。

次に、とくに平地型の神社では重要な景観要素となる神社林^{3,12)}の面積を、現地調査と1/2500基盤地図およびGoogle Earthを利用して計測した。しかし、山中型、山頂型、山裾型の神社で、神社が周辺の山に含まれ神社林が判別できなく、面積の計測が困難な場合は除いた。結果は表-7で、穂高地域豊里地区の豊里穂高神社での約200m²が最小で、穂高地域穂高地区の穂高神社での約23000m²が最大であり、安曇野市全域では2000~8000m²の神社林をもつ神社が多く、面積の平均は約8000m²であった。したがって、とくに平

表-4 参道の形状

(単位:社)	豊科	穂高	三郷	堀金	明科	合計
直線型	12	9	7	4	3	35
曲線型	3	2	0	2	7	14
屈折型	2	1	0	0	2	5
接道型	1	7	3	1	5	17
合計	18	19	10	7	17	71

表-5 地形の形状と神社の立地

(単位:社)	豊科	穂高	三郷	堀金	明科	合計
平地型	16	16	7	5	3	47
山中型	0	0	0	0	4	4
山頂型	0	0	0	0	1	1
山裾型	2	2	2	2	9	17
奥宮・里宮型	0	1	1	0	0	2
合計	18	19	10	7	17	71

表-6 標高と神社の立地

標高(m)	神社数
~550	18
550~600	32
600~650	12
650~700	2
700~750	6
750~	1
合計	71

表-7 神社林の面積

面積(m ²)	神社数
~2000	2
2000~5000	16
5000~8000	9
8000~11000	7
11000~14000	6
14000~17000	3
17000~20000	2
20000~	2

表-8 水涯線との距離

距離(m)	神社数
~20	14
20~40	17
40~60	15
60~80	12
80~100	5
100~200	6
200~	2
合計	71

表-9 公民館との距離

距離(m)	神社数
~100	7
100~200	7
200~400	21
400~600	12
600~800	12
800~1000	5
1000~	5

地型の神社の神社林は安曇野の農村景観を特徴づける要素としての役割を果たしていると考えられる。

次に、神社と水涯線¹⁰⁾との最短距離を、現地調査と1/2500基盤地図を利用して計測した。結果は表-8で、水涯線まで80mの神社が58社(82%)であった。現存する水涯線が神社の造営後にできた可能性もあるが、田園地域である安曇野では水を神として祀る神社もあり、神社と水との関係は近いと考えられる。

また、神社と地区の公民館¹⁰⁾との距離を、現地調査と1/2500基盤地図およびGoogle Mapを利用して計測した¹³⁾。ただし、地区の活動の中心となる公民館と神社との関連をみるため、その距離は最短距離ではなく、ルート検索を用いた移動距離とした。結果は表-9で、公民館から1000m(徒歩15分程度)までに立地する神社が64社(90%)と大多数であった。中には、神社と隣接して公民館が立地している地区もあり、また神社で行われる祭礼などの行事の準備を公民館で行うこともあり、神社は地区の重要な空間であるといえ、神

社と地区の関係性は強いことがわかった。

4. 祭神からみた神社の類型

(1) 祭神の種類

対象の神社で祀られている全ての祭神を氏子総代への聞き取りと旧町村史などの資料に基づき調べた結果、複数の神を祀る神社もあったことから、祭神は全部で 50 種、124 体であった。その祭神の種類を多い順に 3 位まで示すと表-10 になる。ただし、祭神の種類については岡田・加瀬による表現¹⁴⁾を参考にした。安曇野市で最も多かったのは建御名方命の 27 社（38%）であり、これは諏訪湖周辺に位置する諏訪大社の祭神で、諏訪大社の影響が大きいと考えられる。地域別では、とくに三郷地域と堀金地域で半数以上の神社がこの神を祀っていた。次に多かったのは八幡神社の祭神である誉田別尊であり、地域別にみても偏りはなかった。3 番目に多かったのは伊勢神宮の祭神である天照大神であり、地域別にみると、三郷地域以外の地域では祀られていた。一方、安曇野市で最も規模の大きい穂高神社の祭神である穂高見命を祀る神社は市内では 3 社だけであったが、穂高神社で行われるオフネ祭りを通して穂高神社の影響は市内全域に渡っているといえる。

(2) 祭神の意味・由緒による分類

さらに、全ての祭神がもつ意味・由緒について調べた結果、軍事、農耕、海、山、水、国土、学問、神事に関するものに分類できた（表-11）。そこで、各神社の主祭神の意味・由緒による分類を行った結果が表-12 である。ただし、主祭神やその意味・由緒が不明の神社は除いた。最も多いのは、建御名方命や誉田別尊が意味する軍事神であり、これらは祭神の種類でも最も多かった。しかし、建御名方命はもともと水・風の守護神で、農耕神としての信仰があり、田園地域である安曇野市では豊穰感謝として建御名方命が農耕神の意味から信仰されていると考えられる。また、農耕神を主祭神として祀る神社では、本殿が南の方角にある神社が多く（15 社のうち 9 社）、農耕の日照との関連が伺われた。

5. 祭礼

(1) 祭礼の時期

各地区で行われる最も規模の大きい祭礼の時

表-10 地域別の主な祭神の種類

(単位:社)	豊科	穂高	三郷	堀金	明科	合計
建御名方命	10	4	6	5	2	27
誉田別尊	3	2	3	2	2	12
天照大神	3	1	0	1	1	6
神社総数	18	19	10	7	17	71

表-11 祭神の意味・由緒

意味・由緒	祭神名	意味・由緒	祭神名
軍事	建御名方命・誉田別尊	病	素戔鳴尊
農耕	倉稲魂命・瓊々杵尊	国土	大日貴命
海	穂高見命・底筒男命	学問	菅原道真
山	大山祇命・山	神事	天児屋根命・事代主命
水	玉依姫命		

表-12 祭神の意味・由緒による分類

(単位:社)	豊科	穂高	三郷	堀金	明科	合計
軍事	14	9	6	2	6	37
農耕	2	4	1	4	4	15
海	0	2	3	0	0	5
山	0	0	0	1	1	2
水	1	0	0	0	2	3
国土	0	2	0	0	0	2
学問	0	1	0	0	0	1
神事	0	0	0	0	1	1
合計	17	18	10	7	14	66

表-13 祭礼の時期

(単位:社)	豊科	穂高	三郷	堀金	明科	合計
春	10	1	4	6	2	23
夏	1	0	1	0	2	4
秋	7	18	5	1	13	44
合計	18	19	10	7	17	71

表-14 オフネ祭りの有無

(単位:社)	豊科	穂高	三郷	堀金	明科	合計
あり	10	10	2	3	5	30
以前あり	0	1	0	0	1	2
なし	8	8	8	4	11	39
合計	18	19	10	7	17	71

期について、春（3～5月）、夏（6～8月）、秋（9～10月）に区分して調べた。ただし現在、過疎化などのため祭礼を行っていない地区については、祭礼を行っていた直近の時期を参考にした。結果は表-13 で、安曇野市全域では秋が 44 社（62%）と半数を超え、夏は少なかった。これは、祭礼が豊作祈願・感謝を意味していることによると考えられる。地域別にみると、豊科地域と三郷地域では春と秋が同程度だが、堀金地域では春に、穂高地域と明科地域では秋に祭礼を行う地区が多いことがわかった。

(2) オフネ祭り

安曇野市ではオフネ祭りと呼ばれる祭礼が、穂高神社をはじめとして市内の 30 社で時期は異なるが行われている（表-14）。オフネとは神社の祭りで引いたり担いだりする舟をモチーフにした山車のことであり、その名称や表記は地域により様々であるが、総称してオフネと表記されている。オフネ祭りは江戸時代から続くものもあり、各地区の青年団が主体となり地区独自の趣向を

凝らして行われてきた。しかし近年では、若者の都市部への流出により祭り自体の維持が難しく、途絶えてしまった地区もある。

(3) 祭礼の変遷

そのような中で、一度途絶えてしまった祭りを復活させる動きや、元々オフネ祭りがなかった地区で新たにオフネ祭りを作る動きも出てきた。区長および氏子総代への聞き取りとアンケート調査に基づき 1980 年以降の祭礼の変遷を調べた結果、地域づくりに寄与している具体的な 3 事例を図-2 に示す。まず、豊科地域飯田・下飯田地区の諏訪社上下二座神社では、地区の青年男子によって構成される団体（敬明社）が主体となり、手作りの神輿で地区内を巡行していたが、1997 年に途絶えて敬明社も解散した。2011 年に地区の祭りを通して住民同士の絆を深めることを目的に「祭りを楽しむ会」が発足し、子どもから大人までが楽しめるような祭りを再開している。次に、明科地域光地区の五社神社では、1985 年頃まで地区の青年団が主体となりオフネを巡行していたが、青年団の人口減少により、その後は氏子により引き継がれた。また、小学生の子供会によりお囃子も行われてきたが、少子化により将来は困難になる可能性があるという。また、穂高地域橋爪地区の北野神社では、かつて地区の青年団が主体となり山車（オフネではない）を巡行していたが、人口減少により青年団は解散して、1965 年頃に一旦途絶えた。その後は常会（隣組組織）が山車を巡行し、お囃子も行っていた。1980 年頃から、その常会の高齢化により、お囃子は小中学生を主体にした保存会が実施している。また、昭和の頃には露天商が夜店を出して賑わっていたが、その後は露天商も徐々に来なくなったため、1995 年頃から地区の若者が夜店を出して祭りを盛り上げている。以前は常会が持ち回りで趣向を凝らした余興もあったが、近年はカラオケ大会が主流となっている。一方、明科地域上押野・下押野地区（正八幡宮）では、2010 年に長野県の「地域発元気づくり支援金事業」の補助を受け、地区に伝承されてきたが 23 年前に途絶えた祭囃子と獅子舞の映像化（DVD 作成）、地域に残る明科音頭の解説書作成や祭囃子の五線譜化など、地区をあげて伝統文化の継承に取り組んでいるが、この過程において住民は地区の歴史と文化を知ることができ、地区のコミュニティの再生と活性化に

催事名 (主催団体)	1980	1985	1990	1995	2000	2005	現在
神事 (氏子総代・宮司)	→						
映画・カラオケ (青年・敬明社)	→						
神輿・子ども相撲 (敬明社)	→						
焼肉・焼きそばなど (祭りを楽しむ会)	→						
くじ引き・ボンボン釣りなど (祭りを楽しむ会)	→						

(a) 飯田・下飯田地区の諏訪社上下二座神社

催事名 (主催団体)	1980	1985	1990	1995	2000	2005	現在
神事 (氏子総代・宮司・区長)	→						
オフネ (青年団)	→						
オフネ (氏子)	→						
お囃子 (子供会)	→						

(b) 光地区の五社神社

催事名 (主催団体)	1980	1985	1990	1995	2000	2005	現在
神事 (氏子総代・宮司)	→						
山車 (当道常会)	→						
余興 (当道常会)	→						
お囃子 (保存会)	→						
夜店 (露天商)	→						
夜店 (区内の若者)	→						

(c) 橋爪地区の北野神社

図-2 祭礼の変遷

つながっている。

6. おわりに

本研究では、安曇野市の氏子圏に相当する地区における神社の景観の特徴を明らかにすることを目的として、神社の立地の景観特性を把握し、景観を神社のもつ意味に照らして検討した。その結果、次のような結論を得た。安曇野市では、地区内からみた神社の多くは近接型・内部型に分類でき、地形からみた神社の多くは平野部に立地する平地型に分類でき、また神社の多くは水涯線および公民館との距離が近く、神社が住民の生活圏のより近い位置に立地している。また平野部の神社林は面積も大きく、神社は安曇野の農村景観を特徴づける要素として捉えることができる。祭神の種類は諏訪大社の影響が大きく、主祭神の意味・由緒による分類で最も多いのは軍事神であるが、田園地域である安曇野市では豊穰感謝としてこの祭神が農耕神の意味から信仰され、祭礼の時期が秋に多いと考えられる。また、穂高神社の祭神を祀る神社は市内では 3 社であるが、その影響は市内全域に渡り、その意味・由緒が海神であることから行われるオフネ祭りは祭神の種類に関わらず市内 30 社でも行われていて、地域を特徴

づける景観^{2,6)}になっている。一方、人口減少や高齢化により祭礼の維持が困難な状況の地区がある中でも、祭礼を契機として新たなコミュニティづくりを進めている地区がある。住民の交流の場として祭礼の維持につながっている場合や、地区の子どもたちのために地区内の青年が祭りを支援している場合など、伝統的な祭礼の継承よりも地区の住民、とくに子どもたちが楽しめる催事として神社と祭りを活用している。今後、住民が地域に誇りをもち地域の景観を守る中で、地区の特性に応じた神社や祭礼を維持することは、地区の伝統文化の継承だけでなく、いわゆる「ハレ」の景観を生かした地区のコミュニティの維持向上にもつながると考えられる。

【謝辞】

本研究の調査にご協力いただきました、安曇野市の各区長および氏子総代の方々、そして安曇野市役所都市建設部建築住宅課建築景観係の中嶋昭徳様（当時）はじめ建築景観係の方々には御礼申し上げます。

【補注及び引用文献】

- 1) 長野県（2013）：長野県農村景観育成方針，28pp
- 2) 樋口忠彦（1975）：景観の構造，技報堂，168pp
- 3) 是澤紀子・田中稲子・堀越哲美（2005）：景観としての神社にみる自然環境保全の在り方 -京都府文化財環境保全地区を事例として-：日本建築学会環境系論文集 598，65-70
- 4) 嶋田奈穂子・山根周（2010）：滋賀県野洲川流域における神社の立地特性に関する研究：日本建築学会計画系論文集 647，111-118
- 5) 安曇野市の行政地区は全 83 地区からなり、各区長に対する聞き取り調査を行った結果、対象とした全ての神社は江戸期以前に造営されているが、複数の地区で一つの神社の氏子となっている場合（28 地区、12 社）がある一方、明科地域では、明治末期に行われた神社合祀（神社の合併政策）において、民間信仰を尊重し神社の合併があまり行われなかったため、現在でも地区より細かい集落単位で一つの神社の氏子となっている場合（2 地区の 9 集落，9 社）があり、また神社のない地区が 3 ある。したがって、全ての氏子圏は 71（83 地区－（28 地区－12 社）＋（2 地区＋9 集落）－3 地区＝71）になり、これを氏子圏に相当する地区単位とした。そのため、対象とする神社の総数は 71 社となった。具体的な 71 社名

は「上鳥羽諏訪神社，下鳥羽大同神社，本村神社，吉野神社，成相八坂神社，新田神社，諏訪松尾神社，踏入八幡宮，洲波神社，重柳八幡宮，真々部諏訪神社，諏訪社上下二座神社上社，諏訪社上下二座神社下社，中曽根諏訪神社，熊倉春日神社，伊勢宮神社，田澤神明宮，五社神社，矢原神明社，白金八幡社，穂高神社，北野神社，香取神社，伊夜比古神社，豊里穂高神社，三輪神社，館宮神社，新屋諏訪神社，大宮神社，立足諏訪神社，日吉神社，久松諏訪神社，塚原八幡宮，牧諏訪神社，青嶋神社，戸隠神社，白狐神社，小倉八幡宮，小倉諏訪神社，玉鉾神社，津島社，長尾諏訪神社，住吉神社，七日市場諏訪神社，三柱神社，伍社宮，中萱熊野神社，山神社，上堀諏訪神社，中堀神明社，下堀扇町諏訪神社，小田多井八幡神社，田尻諏訪神社，賀茂神社，大足諏訪社，大足熊野社，白山社，犀宮社，廣田神社，潮神明宮，上生野正八幡宮，正八幡宮，高根神社，荻原神社，中村大己社，藤城社，潮沢春日社，山中八幡宮，山神社，大天白社，潮沢諏訪社」である。

- 6) 祭神にはその地域で暮らす人々の願い（鎮魂・慰霊・豊穰など）が込められており、その願いの拠り所となる場所が神社であると考えた。祭礼についても、その願いを強く表すための行動と捉えた。そして、その願いはその地に神社が造営された理由となり、神社の景観に反映されると考えた。また祭礼は民族文化財に分類されるが、文化財の中でも、風土と人の営みによって生み出される風景に価値を見いだすのが文化的景観であり、農村景観の保全を考える上でも文化的景観の維持は重要である。安曇野市内では、「穂高神社のオフネ祭りの習俗」は長野県無形民俗文化財に、「重柳八幡宮祭り舟」，「住吉神社のオフネ祭り」，「潮神明宮の柴舟と人形飾り物」，「中萱熊野神社のオフネ祭り」は安曇野市無形民俗文化財に指定されているなど、祭礼の特徴が際立っている。
- 7) 旧町村史などの資料とは、「豊科町誌編纂委員会：豊科町誌 歴史編・民俗編・水利編（1995），豊科町誌 別編（1999），豊科町誌 近現代編（1999），豊科町誌 自然編（1995）」，「穂高町誌編纂委員会：穂高町誌 歴史編（1991），穂高町誌 自然編（1991）」，「三郷村誌編纂委員会：三郷村誌 自然編・民俗編（2004），三郷村誌 歴史編・村落誌編（2006）」，「堀金村誌編纂委員会：堀金村誌上巻 自然・歴史（1991），堀金村誌下巻 近現代・民俗（1992）」，「明科町史編纂会：明科町史 上巻（1984）下巻（1985），明科町史 自

然編 (2007)」である。

- 8) 明科町史によると、明治以前は集落単位で神社を祀っていたのが、神社合祀により現在の地区単位で神社を祀るようになったが、明科地域では民間信仰が強く、神社合祀をあまり行わなかったため集落単位での信仰が残っている。その結果が神社の位置に表れていると考えられる。
- 9) スタジオワーク (2013): 建築デザインの解剖図鑑, エクスナレッジ, 176pp
- 10) 櫻井治男 (2012): 知識ゼロからの神社入門, 幻冬社, 191pp
- 11) 篠原修 (2007): 景観用語辞典 増補改訂版, 彰国社, 355pp
- 12) 中村良夫 (2005): 環境と空間文化, 学芸出版社, 190pp
- 13) 神社と地区の公民館との距離については、明科地域では、地区より細かい集落単位で一つの神社の氏子圏となっているが、公民館は地区単位にあるため、地区の公民館と公民館がある集落の神社との距離を計測した。また、複数の地区で一つの神社の氏子圏となっている地区では、神社のある地区の公民館と神社との距離を計測した。したがって、計測した神社総数は71にならない。
- 14) 岡田荘司・加瀬直弥 (2007): 現代・神社の信仰分布 -その歴史的経緯を考えるために-: 文部科学省 21世紀 COE プログラム 國學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」, 63pp

(原稿受付 2014. 2. 27)